

21世紀の日本のかたち（65）

—大学の国際化とグローバル人材の育成（3）—

早稲田大学都市計画研究室の場合



戸沼幸市

<（一財）日本開発構想研究所 代表理事>

1. 早稲田大学都市計画研究室（建築系）の誕生と時代状況

早稲田大学理工学部建築学科に武基雄教授（武研究室）、吉阪隆正教授（吉阪研究室）、戸沼幸市助手の陣容で、大学院に都市計画専修が誕生したのは1966（昭和41）年4月でした。同年、東京大学では都市工学科の第1回卒業生を送り出し、修士課程を設置しております。

1960年代は日本が経済の高度成長期に向い世界第2位のGNP（国民総生産）大国として世界に存在感を示す一方、公害、環境破壊が大きな社会問題となり、また東京一極集中、過密の弊害が多方面に深刻な事態をもたらしておりました。

国土計画としては太平洋ベルトを主軸とする国土像に重ねて、地方に大規模プロジェクトを画いた新全総（新全国総合開発計画1969（昭和54）年）が動き出しておりました。

これまで我が国の大学の中で都市計画分野の教育と研究を担ってきたのは工学部、土木学の講座などであり、早稲田大学では理工学部土木学科に1研究室（石川栄耀教授～松井達夫教授）が設置されておりました。

早稲田大学理工学部建築学科（1909（明治42）年設置）は、計画系（建築計画、建築史）

とエンジニアリング系（構造、設備、材料施工）で構成されてきたのですが、建築を取り巻く時代状況として建築学科も都市との関りが強くなり、早稲田の建築学科の教育研究の柱として建築計画研究室と並立するかたちで武、吉阪教授が主唱して都市計画研究室が創設されました。

当時、武教授は丹下健三東大教授と並ぶプロフェッサーアーキテクトであり、鎌倉の乱開発に反対する市民派建築家の先頭に立って活躍しておりました。吉阪教授は活動の出発点から建築と都市を一体に考える国際派でしたが、加えて考現学（考古学に対して）を称え、独特なスタイルで住居、農村研究を行っていた今和次郎教授の弟子筋でもありました。

市民派と自在な国際派の都市計画研究室の間に助手として加わった私の立場としては、60年代、学園紛争もあり、時代が大きく動いていることを予感しつつ、官立、国立系、土木主導の都市計画とは別の、日本という国家と国土を根底から問い直す作業として学生の教育と研究に手探りで当ることになりました。

2. 21世紀の日本のかたち

私ども創設期の都市計画研究室として最初に取り組んだのが、「21世紀の日本国土と国

民生活の未来像」を求める明治100年（1968年）を記念した政府（佐藤栄作内閣）主催のコンペティションへの参加でした。

これは吉阪教授が学部横断的に文系理系の教員に呼び掛け、松井教授を代表者とし、早稲田大学「21世紀の日本研究会」を立ち上げて参加したものです。研究グループは50名で、生活、社会、政治、経済、交通、科学技術、環境の班に組み分けをして研究しましたが、「21世紀日本のかたち」をめぐる1968～70年の間、自由奔放に議論を展開しました。「研究グループ」に併設して「計画作成グループ」を設けましたが、これに開設したばかりの大学院都市計画研究室の大学院生27名（留学生を含む）とU研究室（吉阪教授の指導する設計集団）14名が当りました。これをサポートする事務局を入れて100名程の早稲田大学始まって以来の大研究集団で3年間、参加者は熱心にこれに取り組みました。「アニマルから人間へ」「ピラミッドから網の目へ」とした早大の提案は最優秀賞に選ばれ、社会的にも一定のインパクトを与えました。21世紀の国土像早大案は次のようなものです。

- ・環日本海時代構想（21世紀の「国土像」としては、当時の太平洋メガラポリスのイメージを反転させて構想）
- ・大陸棚の利用
- ・青函圏構想（青函インターブロックの提案）
- ・東京再建計画（首都直下地震を想定して東京湾岸の土地利用の見直し、下町地域の移転案など）
- ・北上京遷都案（東京から東北への一括遷都の提案）
- ・道州制に向けた国土7区分案（日本列島を

太平洋と日本海を含むように輪切り状にした案）

- ・国連をNYから南極への移転案など

私自身、学園紛争時の理工学部長職の吉阪教授に替って、「研究グループ」と「計画作成グループ」のつなぎ役となり、案のとりまとめに当りました。早大案は1970年という時代の変曲点からみた21世紀の日本のかたちを提案として画いたこととなります。誕生間もない早大建築系都市計画研究室の最初の作業であり、私としてはこの案を背負っての出発となりました。

3. 戸沼研究室（1972～2003）の都市計画研究の課題と方法

早大建築学科内に武研究室、吉阪研究室と並んで戸沼研究室の開設が許されたのは私が助教授に任命された1972（昭和47）年4月でした。大学の研究室は指導教授と大学院博士課程、修士課程、学部卒論生（4年次）で構成されます。

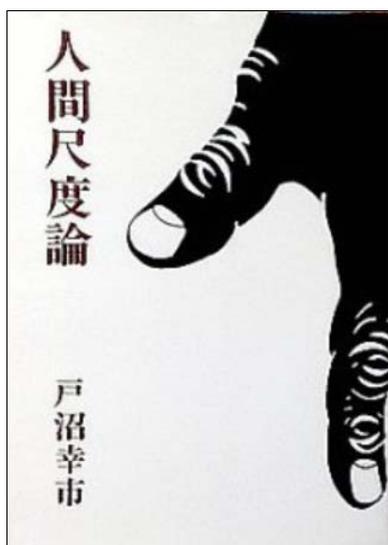
私自身の研究課題は早大21世紀の日本研究会が画いた「21世紀の日本のかたち」にどう接近し、これをいかに実現するか、いわば地域・国土計画的課題でした。

一方、吉阪門下生としての私の経歴は学部、大学院生時代、ル・コルビジエ設計の国立西洋美術館（上野）、U研究室設計の東京八王子大学セミナーハウスの計画などに関与しており、研究室の都市計画においてもデザインに対する関心が強く、都市景観設計分野に実践的課題を置きました。研究室は大学院生との共同作業として、いくつかの建築、都市設計を手掛けております。建築も都市も具体的な

土地、空間に存在するものであり、これらは土地、地域のリアリティと切り結んで生まれるものです。建築設計もまちづくり、地域・都市計画も、現地の地理、地形、歴史や文化の理解なしには進めることができないというのが戸沼研究室の姿勢でした。

建築、都市設計のための教科書にと書いたのが『人間尺度論』（1978年 彰国社）です。人間の創る造形物の原基としての「人間尺度」について書いたこの本を、韓国の留学生金英厦君が韓国語訳にして出版してくれました。英語訳についてはWSE(World Society of Ekistics)の機関誌、「EKISTICS ジャーナル」が要約文を載せてくれました。

人間尺度論の表紙



資料：『人間尺度論』戸沼幸市著 彰国社 1978年

これにつづいて、『人口尺度論』（1980年 彰国社）を都市計画の教科書としました。これは人間居住環境の基本的構成要素を“自然”“人間（個人と社会）”“人工（物とシステム）”としてその中心に人間尺度の原基である“私”を置き、建築から都市、地域、国土、地球地域、地球といった空間分類について人口を尺

度として分類したものです。都市計画研究の見取り図を私なりに示し、大学院生はそれぞれの興味にしたがって課題に取り組むべしというのが吉阪、戸沼につながる早大都市計画研究室の方法でした。

早稲田大学の建築、都市計画にとって不幸だったことは、大黒柱の吉阪教授が1980（昭和55）年12月急逝（63歳）されたことでした。吉阪研究室には留学生を含めて博士、修士課程の大勢の大学院生が在籍しており、武教授の定年とも重なって戸沼研究室が一手にこれらの院生を引き受けることになりました。この状況の中で自立心の強い吉阪研育ちは師匠の膨大な遺稿のとりまとめ作業にかかり「吉阪隆正集」17巻（勁草書房）を残してくれました。

戸沼研究室の研究、提案、造形の視点は出発点から“グローバル（グローバル+ローカル）”であり、大学院生たちとは毎年、海外調査に出かけました。これには当日本開発構想研究所からの委託調査も含まれております。水先案内人は研究室在籍の留学生であり、その土地の大学との交流をもち、大学院生共々、国々の地政学的政治や文化を肌で感じることができ、グローバルな知見を広げてゆきました。

4. 留学生たちの活躍

地球人吉阪隆正先生の流儀を受け継いでいた戸沼研究室も大勢の留学生を受け入れました。このうち外国人留学生で博士号取得者は10名を超えており、帰国して母国の大学で教職に着き、現在も活躍をしております。

韓国では金英厦檀国大学碩座教授が韓国地域社会学会会長、早稲田大学校友会韓国稲門

会副会長、金賢淑全北大学教授は博士号をもつ女性都市計画家として国家のこの方面の委員会の主要メンバー、金裕赫檀国大学名誉教授はセ・マウル（新しい村）運動の指導者であり、同大名誉教授会会長です。聖潔大学文叙教授、地方公務員の金鐵権君、そして榊原在雨国民大学元教授は日韓両国の大学で教鞭をとりました。

台湾の陳亮全台湾大学教授は台湾の防災計画の第一人者です。早大卒業後も日本の都市計画関係者と情報交換し、私どもが世話人となって作り上げた日・韓・台の都市計画シンポジウムの主要メンバーです。李宣晉君は大学で教えながら自分で事務所を持ち、中国大陸の仕事を手掛け、李東統君は日本企業に就職し、それぞれ活躍しております。

中国からは上海、同済大学出身の葉華君が日本の実例を参考に中国の歴史景観に関する研究を博士論文としてまとめ、現在は日本の野村総合研究所の中国事務所の責任者となり、日中をつなぎ、中国全土を飛び廻っている様子です。

ロシアからのアルタイ工科大学ウラジミール・シードロフ教授は日本の東京下町の生活と家屋に興味をもち、これを博士論文にまとめた日本びいきです。今もって早稲田大学のロシア研究、ウラジオ研究を支援してくれています。

オーストラリアからはシドニー大学のピーター・アームストロング上級講師が日本や韓国の地方都市の歴史を研究し、韓国の大学でも教えております。彼は大の相撲好きで自分でも“まわし”を締めるのです。

吉阪研育ちでは、ブルーノ・タウト研究の第一人者で日本文化を論文のテーマとしたド

イツのマンフレッド・シュパイデル博士がアーヘン大学教授、台湾の都市再開発の第一人者黄健二博士が政治大学、文化大学で大勢の学生を教えました。ソウルの漢陽大学教授、故金真一博士は韓国建築学会会長となり、日韓の学術交流に大きな力を発揮してくれました。

修士課程の留学生も多く中国、東北出身の王越非、台湾の范姜文誠、翁雄聰、インドネシアのウイリ・ウイジャシヤ、エデイ・ダルマワン、アハマト・ヘリ、マレーシアの黄國鳳、ペルーのホセ・佐藤などの諸君はみな健在です。

戸沼研究室も含め、早大都市計画専修は博士、修士論文とも日本語でしたから、皆日本語が達者で今もって出身国と日本との交流の懸け橋となっています。

研究室に留学生が在籍することの効用は日本人学生の視野が格段に広がる点です。中国や韓国の言葉に興味を持つ学生も出てきます。

専門が建築、都市設計の場合、「形」「造形」が一つの言語となります。言葉がコミュニケーションの手段として重要なことは言うまでもありませんが、造形芸術の伝えるコミュニケーション力も大きく、研究室の共同創作、国際コンクールでの入賞などの成功体験は自らの未来を切り開くバネとなり、学生にとっての財産といえましょう。

5. 日本人という地球人

早大建築学科都市計画学研究室の卒業生の就職先は多様で、外資系企業に入るケースもありますが、多くは日本企業です。建設会社、不動産、建築、都市設計事務所、都市・地域計画コンサルタント、自営、商社、自治体、

官公庁、大学などです。

経済のグローバル化にともなう、海外勤務のケースも多くなりつつある様子です。卒業以来 JICA や NPO に入り外国暮らしの長い人、国際コンサルタント会社に入って中東の国づくりに参加し、同僚のカナダ人と結婚して活躍している女性、イギリスやオーストラリアに移住して活動している卒業生など、戸沼研究室の例をみても大学生の活躍の舞台は 21 世紀、まさにグローバルです。

私が主査を務めた 20 名の日本人博士号取得者の多くは大学教員になり、藤井敏信東洋大学国際地域学部長はじめ内外の大学においてまさにグローバル人の育成に当たっています。

戸沼研究室は「21 世紀日本のかたちは如何に」と手探りを続けた 20 世紀末の都市計画研究室ということになりますが、卒業生達が 21 世紀の地球時代、各自それぞれの立ち位置から志をもって自己実現、自己表現をしていることは頼もしいことです。

先日、久々に研究室卒業生が留学生共々集まる機会がありましたが、大学の一研究室がグローバル・ビレッジであり、韓国人、台湾人、中国人、インドネシア人、ロシア人…そして日本人という「地球人」の集まりに、21 世紀という時代を見る思いでした。そして、グローバル人（材）の育成といったことも、息の永い付き合いがあつてこそのものであると感じたことでした。

戸沼研究室は 2003（平成 15）年 3 月、私の早稲田大学定年により閉じましたが、これを受けついで早稲田大学建築学科都市計画の研究と教育は佐藤滋研究室、後藤春彦研究室、有賀隆研究室が受け継いでおり、早稲田大学の大学間グローバルネットワークの要石とな

って、意欲的にグローバル人の育成に当たっております。

それにしても、1970 年に想像した 21 世紀初頭の「日本像」は追い求めるものでしたが、21 世紀に入った日本の現在には、新聞、テレビ、ネットに世界の情報が溢れ、政治にも経済にもグローバルの大波が押し寄せております。

現在、このような状況の中で憲法改正を含め「日本のかたち」について各方面から様々な議論が起きています。この 8 月 15 日は終戦 68 年目に当たり、改めて「大学・交流・平和」の文脈の中で大学は自らの国際化にしっかりと向き合つてほしいと願います。

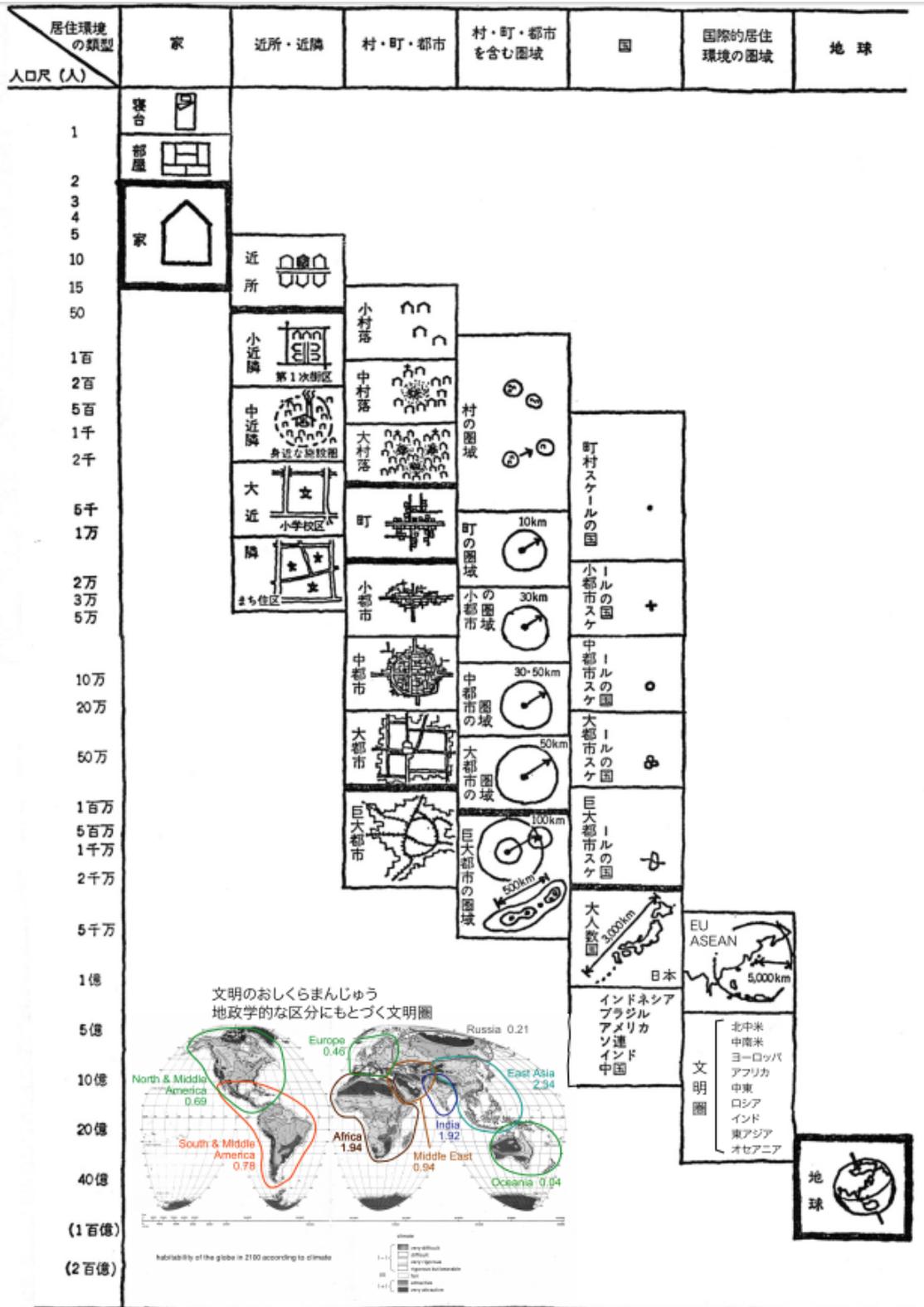
国づくりに合わせ大学の設立運営の相談に与っている当日本開発構想研究所として、「UED レポート 2013 夏号」にこの問題を特集しました。大方のご参考になれば幸いです。

【参考文献】

1. 『二十一世紀の日本・上 ピラミッドから網の目へ』『二十一世紀の日本・下 アニマルから人間へ』早稲田大学二十一世紀グループ 吉阪隆正・宇野政雄編 紀伊国屋書店 1972
2. 『人間尺度論』戸沼幸市 著 彰国社 1978
3. 『UED レポート 2013 夏号 大学の国際化とグローバル人材の育成』（一財）日本開発構想研究所

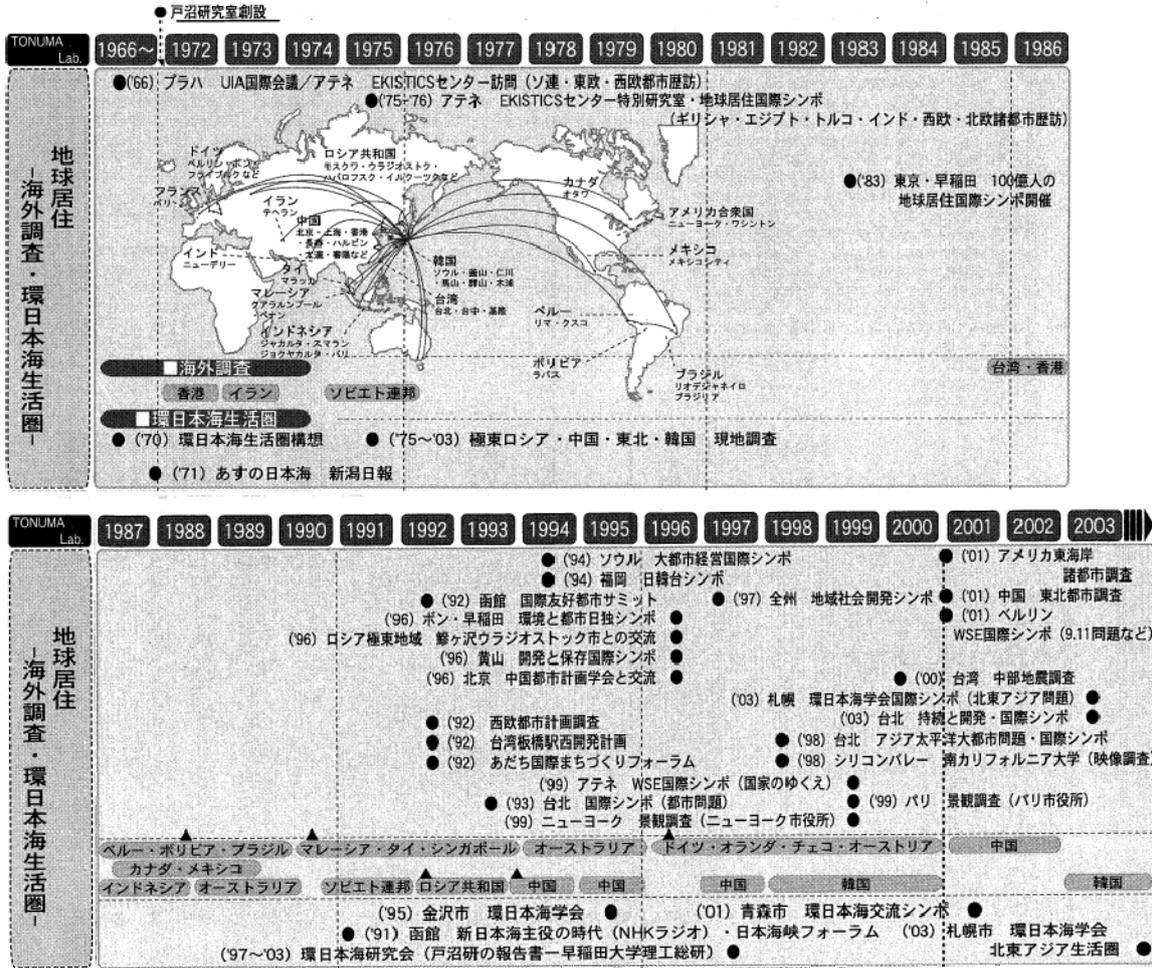
(2013. 8. 25)

人口尺と対応させた人間の居住環境の分類表



注：「文明のおしくらまんじゅう 地政学的な区分にもとづく文明圏」に示した数値は2050年における予測人口（単位は10億人）

戸沼幸市研究室 (1972~2003) 研究・提案・造形



(筆者が編集)

出典：「戸沼人間居住環境学の軌跡 研究・提案・造形」 戸沼幸市監修 早稲田大学理工学部建築学科戸沼幸市研究室 2004年3月